



町民文芸

只見短歌会 令和五年八月詠草

思ひ出もうすれて来しが友として行きし佐渡へのおけさ懐かし
馬場 八智

草とりの手を休めれば朴ほおの木の花の香りに疲れをいやす
目黒 富子

猛暑なり汗ばむ日々伊南川で子供の頃の水あび思ふ
関谷登美子

手を伸ばし抱つこの要求我が息子レッサーパンダの威嚇のやふに
立花 奏音

時をりに母の遺影を置いてみる常座りぬし椅子なればこそ
新国由紀子

娘こや孫を見送りし後に送り火を夫つまと二人でたきある夕べ
渡部ヨリ子

窓外の棚に止まりし赤トンボの動き見てゐて飽きることなし
故 新国 洋子（遺作）



只見俳句会 八月定例会

天高し六十年目の只見線
終戦日祖母の涙も遠くなり
信

夏休みまだまだあるよ余裕だよ
あさがおを放れず見入る一年生
都

花冷えや浅いねむりの羊たち
温泉の窓に張りつくシャボン玉
味代子

紫めく馬鈴薯の花コーヒー飲む
峠の豪雨車で抜けて梅雨の明け
真理子

えごの花降りけもの道照らすごと
田舎路や鳥居の先の夏薊
紺 青

関門とおぼしき跡や椿の実
満天星や農学校の碑を照らし
恒 夫

日高俊平太 指導

田子倉湖ぐるっとめぐる青あらし
全山のなびく葉裏やダム堰堤
礼

蜂蜜の味たしかめるヨーグルト
炎天や瓜の間の土の色
一 穂

猛暑日や孫の寝返りして安堵
坂道を孫と競争雲の峰
修 一

